

特集	<b>解体・リサイクル・廃棄物処理</b>
グラビア	4 ドイツ・ミュンヘン国際建設機械見本市写真集
巻頭言	12 真剣かつ早急に対応すべき大規模災害における被災家屋の解体と適正処理 島岡 隆行 九州大学大学院工学研究院 教授
行政情報	13 建設残土の不法投棄問題に関する一考察 直原 史明 国土交通省 総合政策局 公共事業企画調整課 環境・リサイクル企画室長
	17 福島県内の除去土壌等の取組を中心とした東日本大震災復興の取組 山田 浩司 環境省 環境再生・資源循環局 環境再生施設整備担当参事官室 参事官補佐
	24 建設業法における技術者制度と解体工事業 国土交通省 土地・建設産業局建設業課
特集・技術報文	30 発破によるコンクリート構造物撤去 施工結果を次段階施工へフィードバックして、ダム本体撤去を効率化 宮地 利宗 フジタ
	37 余盛コンクリートを瞬間破砕する杭頭処理工法 鹿島 カット&クラッシュ工法 中村 隆寛 鹿島建設(株) 技術研究所 先端・メカトロニクスグループ 主任研究員 柳田 克巳 鹿島建設(株) 建築管理本部 建築技術部 技術企画グループ グループ長 福島 隆 鹿島建設(株) 建築管理本部 建築技術部 技術コンサルグループ 担当部長
	43 超高強度繊維補強コンクリート床版を用いた高速道路入路における床版取替の施工実績 1車線幅での床版取替え工事に対応した専用架設機の開発 菅野 雄彦 鹿島建設(株) 関西支店 安全環境部 機電グループ 次長 大西 和行 阪神高速道路(株) 大阪管理局 保全部 保全工事課 大規模修繕工事担当課長 村岸 聖介 鹿島建設(株) 関西支店 土木部 技術グループ 次長
	48 熊本市内で発生した被災家屋解体廃棄物の中間処理完了 分別解体の促進と広域処理によりリサイクル率75.7%を達成 花木 陽人 ㈱鴻池組 本社 土木事業総轄本部 技術本部 環境エンジニアリング部 課員 西村 良平 ㈱鴻池組 本社 土木事業総轄本部 技術本部 執行役員 技術副本部長 角矢 佳浩 ㈱鴻池組 大阪本店 土木部 工事部長
	55 都市部解体作業の生産性向上を目指して SK170-10 階上解体仕様機 傳田 望 コベルコ建機(株) 技術開発本部 ショベル開発部 中型ショベル開発グループ
	61 発電所リニューアルへの低振動・低粉じんコンクリート解体工法の適用 スロットスターを用いたSD工法による基礎コンクリートの解体 原田 竜也 ㈱奥村組 西日本支社 関西土木第一部 主任 橋高 豊明 ㈱奥村組 西日本支社 土木技術部 担当部長
	67 球形ガスホルダーの革新的な解体工法の開発 リング皮むき工法と溶断ロボットリング☆スター 関谷 竜一 ベステラ(株) 開発営業部 部長

	69	3D モデルを用いた内部構造の可視化による特殊設備の解体 吊り下げ式ボイラー設備の解体事例 岡野 直幹 バンドーレテック(株) 工務課 主任
ずいそう	73	「晴耕雨読弾」と「雪山」 長沢 敏一 伊藤忠建機(株) 建築機械部長
	75	東北めぐり 齋藤 貴之 西松建設(株) 北日本支社 土木部 機電課 課長
JCMA 報告	77	国際建設機械・建設資材製造機械・鉱業機械・建設車両・ 関連機器専門見本市 (bauma 2019) 第 65 回欧州建設機械施工視察団 視察報告 小野 秀一 (一社) 日本建設機械施工協会 施工技術総合研究所 研究第二部 部長 永沢 薫 (一社) 日本建設機械施工協会 施工技術総合研究所 研究第三部 研究員
部会報告	86	平成 30 年度第 2 回若手現場見学会 新東名高速道路 ぐみ沢下高架橋 (PC 上部工) 工事 建設業部会
	88	東京外かく環状道路トンネル現場見学会 機械部会 トンネル機械技術委員会
トピックス	91	大河ドラマ「いだてん」の撮影協力『リアル人足』 相田 尚 (株) NIPPO JCMA 機関誌 編集委員 (当時)
	95	新工法紹介 機関誌編集委員会
	97	新機種紹介 機関誌編集委員会
統計	99	主要建設資材価格の動向
	103	建設工事受注額・建設機械受注額の推移 機関誌編集委員会
	104	行事一覧 (2019 年 4 月)
	108	編集後記 (内藤・石倉)

◇表紙写真説明◇

球形ガスホルダーの革新的な解体工法の開発

写真提供：ベステラ(株)

2012年に埼玉で行われた球形ガスホルダーの解体工事中の状況である。解体に際しては、鋼板を天井部から渦巻状に連続して溶断する「リンゴ皮むき工法」を採用しており、切除部分が自重でガスホルダーの内部に重なり合うことなく並んでいく様子が見取れる。作業は職人ではなく専用のロボットが行っており、磁力で鋼板に張り付いたロボットがアームを駆使して溶断している。本現場は周囲を2本の線路で挟まれた立地にあるため、高い安全性が求められるが、足場を使用しなくとも安全性を維持できる工法となっている。